

OLIVE-SPIRIT

関東学院学報 オリーブ・スピリッツ



September.2023
No.

64



社会に開かれた、関東学院大学の横浜・関内キャンパス。イベントホール、デジタル図書館、コワーキングスペース、ブックカフェなど、市民の皆様の知的活動の拠点として幅広く活用されるキャンパスをめざします。



ヨコハマから未来へ。〈これからの多文化共生を考える〉

横浜・関内キャンパス開校記念シンポジウム開催

私達は心の中の“関所”を取り払うことができるのか。
初回は芥川賞作家・楊逸氏をゲストに意見を交わしました。

関東学院大学では、横浜・関内キャンパス開校を記念し、各界で活躍されている方を招いてのシンポジウム「ヨコハマから未来へ。〈これからの多文化共生を考える〉」を全4回にわたって開催します。会場は同キャンパス内のテンネー記念ホールです。キリスト教に根差したグローバルな視点を交えつつ、多様性を認め合い、他者や地域と共生して生きる社会を考えていきます。

6月23日に開催した初回のゲストは芥川賞作家の楊逸（ヤンイー）氏です。氏は中国ハルビン出身。文化大革命期の1970年、5歳の時に下放（知識人を地方の農村に送り出し再教育する政策）による過酷な生活を経験し、1987年来日。一から日本語を学び、2007年にデビュー作「ワンちゃん」で文壇新人賞を受賞します。2008年に「時が滲む朝」で芥川賞受賞。日本語を母国語としない作家では史上初の受賞者です。

レギュラースピーカーは、文芸評論家で

も難しい選択です。

楊逸 私は以前、中国語の新聞社に勤めていましたが、当時も在日中国人から多くの相談が寄せられました。技能実習生や、なかには日本の農村に嫁いだ中国女性からの相談もありました。私自身は苦労が気にならない性格ですが、日本で結婚と離婚を経験し、子ども二人と再出発となった時に、中国人女性の母子家庭と言うと民間のアパートはどこも貸してくれませんでした。現在は帰化して日本国籍を取得しています。

マイヨール 日本に30年以上住んでいます。日本には現状、親を呼べる在留資格がありません。私は一人つ子で、80代の母を日本に呼ぶために交渉してきましたが、残念ながら叶っていません。法律を変えるのは難しいことですが、私が言いたいのは一人ひとりに何ができるのかということです。

富岡 まさに今日いらしている皆さんと共有しなければならぬ課題です。日本人は古代から外国文化を受け入れてきた歴史があるのですから、そういう視点で考えていきたいですね。

それぞれの考え方を尊重し
暮らしていける社会に

楊逸 日本人の人はとても寛容だと思えます。問題があるのは日本の制度です。労働力不足は深刻な問題ですが、だからと言って、筋肉だけを移植するようなやり方ではだめですね。いかにヒューマニティを重視した制度にするかが大事だと思います。

マイヨール 外国人が置かれている現状は、

もある国際文化学部富岡幸一郎教授と、フランス国籍のNHK国際報道ジャーナリストで、外国人労働者や入国管理制度の取材を続けるロドリグ・マイヨール氏。御三方の活発な討論の一部をご紹介します。

多様な国籍や背景の人達が
一緒に考えることが必要

富岡 2070年に日本の総人口は8千7百万人まで減少し、その約1割を外国人が占めると推計されています（厚生労働省の国立社会保障・人口問題研究所発表）。これは現在の5倍の割合です。入管法（出入国管理及び難民認定法）が改正され、2019年4月から日本政府は事実上、移民を受け入れる方向に舵を切りました。私達は外国人やその文化とどのように共生していけば良いのでしょうか。このテーマを関内で語り合うのは実に意味のあることです。関内・関外の名称は、横浜開港後に江戸幕府が関

日本人の目には見えづらいと思います。でも、買い物で困っていたら声を掛けたり、日常の中で自分に何ができるかを考えれば、できることは意外と多いはずですよ。

富岡 お二人は既に日本にいる期間のほうが長いですが、ご自身のアイデンティティはどこにあるのですか。

マイヨール 私は「在日フランス人」ですね。フランスは故郷ですが、私自身は死ぬまで日本にいたいと思いますし、これからも日本のために頑張ります。

楊逸 アイデンティティは自分では決められないし、他人にも決められたくありません。だから死んだ後に神様に「私、何人だったんですか」と聞いてみようかなと笑。アイデンティティ探しは人生そのものだから、急いで決める必要はないと思います。

富岡 楊逸さんは日本に来てから日本語を勉強して小説を書かれた。本当にすごいことです。外国人が使う日本語は、たとえ文法が間違っていたり、表現がギクシャクしていても、新しい日本語や文学を生み出す可能性を秘めている。それは日本人にとっても重要なことですし、小説以外でも同じことが言えるのではないのでしょうか。

第一回シンポジウムの動画を
こちらから視聴いただけます。



関東学院大学から始まる、新たな時代のセツルメント運動へ。

この30年ほど、世界は人やもの、お金が国境を超えて動いていくグローバリズム時代に突入し、日本もその潮流の中にいます。それにより貧困や地域差など様々な格差が顕在化していることも事実です。そこで関東学院大学として、今起こっている社会の歪みや諸問題を共に考えていくことが連続シンポジウムの趣旨です。

今、関東学院大学は福島や沖縄との社会連携を強めています。福島は東日本大震災と原発事故からの復興、沖縄は基地や貧困の問題などが課題となっていますが、これらはまもなく日本の大都市圏でも顕在化するだろうというのが小山巖也学長のお考えです。私も同感です。そこで、このシンポジウムでは沖縄や福島の諸問題も取り上げたいと考えています。

関東学院は、この横浜の地で1928年から1937年までセツルメント活動を行った歴史があります。セツルメントとは、貧困者や労働者と一緒に居住して生活向上や社会活動への参加を支援する、イギリス発祥の運動です。様々な問題で苦しむ人がある現代、地域や他者と関わり持続的社會を目指す意味で、横浜から新しい形のセツルメント活動を発信したいですし、そこから様々な社会連携や議論に派生していくことを願っています。



関東学院大学 国際文化学部 教授
文芸評論家 神奈川近代文学館理事

富岡 幸一郎

10月6日開催の第二回は、UNDP（国連開発計画）親善大使を務める女優の紺野美沙子さんをゲストに迎えます。討論後には朗読「星は見ている～原爆でわが子を亡くした父母らの手記より～」もお届けします。



今なお課題が多い

日本の在留資格の実態

所を設け、外国人と日本人の居住地を分けたことに由来します。今、私達日本人は心の中の関所を取り払うことができるのか。多くの人達と一緒に考えていきたいと思っています。



左から富岡幸一郎教授・楊逸氏・ロドリグ・マイヨール氏

時から翌朝8時まで工場で働きながら日本語学校に通いました。在留資格を得るためには学校の出席率90%以上が必要なので必死でした。

マイヨール その状況は今も変わっていません。多くの外国人労働者は、実際は技能実習生や留学生など、何かを学ぶ目的で来日しています。また、日本に住むには在留資格が必要ですが、その範囲でしか権利を保障されません。帰化すべきなのか、フランス国籍のままでいるべきなのか、私にとって

1リッターのガソリンで何キロメートル走れるか 極限の燃費に挑戦する関東学院中学校高等学校「技術部」

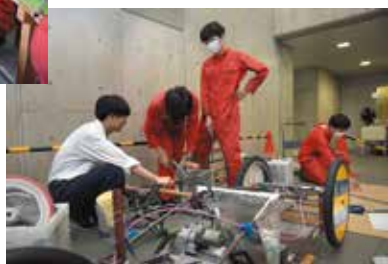
エコカー製作をはじめ、様々なものづくりに取り組みながら、協働の精神や自己発信能力を養う技術部の活動を紹介します。

ものづくりを通して
協働力や主体性を身につける

校訓「人になれ奉仕せよ」のもと、生徒の自主性を重んじながら幅広い知識と技能を育む関東学院中学校高等学校。ものづくりを通じて同校の理念を具現化しているのが技術部です。

技術部は毎年、「ホンダエコマイレージチャレンジ」(通称エコラン)に挑戦しています。これは50ccバイクのエンジンを搭載したエコカーを製作し、速さではなく燃費性能を競うレース。中学生から一般まで全7クラスに分かれて実施されます。技術部は2009年から参加。コロナ禍の影響で3年ぶりの開催となった昨年は4台が出走し、高校生クラスで86台中37位(完走44台)という結果を残しています。今年も中2から高2まで学年ごとに1チーム、計4台の出場を目指します。

技術部ではエコカー製作と植物栽培を共



同課題とする一方、各部門が個人的に興味のあるテーマで自主研究にも取り組んでいます。また、校内の備品修理、かんらんさい文化祭のステージ設置など、様々な依頼に積極的に貢献しています。理工系に進学する部員は多く、誰もが知る情報機器メーカーや航空会社にも勤める卒業生もいます。

撮影で訪れた日は、9月9日・10日に栃木県のモビリティリゾートもてぎで開催されるエコラン全国大会に向けて車体製作に取り組んでいました。お揃いの赤い作業着に身を包み、ミーティングから作業までテキパキと動く様子は、活気あふれる町工場さながらです。

発表し、その後はデジタルアートの大会に応募したいと思っています」

技術部は中高合同で活動し、増田柊凜さん(中3)は中学部長を務めています。「新入生が入部すると、中2や中3は教育係として工具の使い方や基本的な技術を指導しますが、私も最初は全く知識がありませんでしたが、車が好きな先輩や同級生からいろいろ教えてもらいました。中3は今年、インジェクション(電子制御で燃料噴射量を自動化す

る装置を採用したエンジンに挑戦し、四苦八苦しながら皆で頑張っています」

中学副部長の斉藤晃成さん(中3)は、車が好きで技術部に入部しました。「入学前から技術部の存在を知り、すぐ入部しました。今はフレームの溶接や切断、鋼材の加工をメインに担当しています。設計段階から皆と一緒に考えていく中で、設計図が実になった瞬間や、アイデアが動いた瞬間に嬉しさを感じます」

他の3人もものづくり

が好きで、小学生の頃に説明会や学校調べを通じて技術部の存在を知り、入学の動機に繋がりました。技術部の魅力を尋ねると、「語り尽くせないほどありますが、自分の作りたいものができることや、学年を超えた仲の良さが魅力です」(櫻井さん)、「信頼や友情を築きつつ、チームで一つの大きなものを作り上げていく快感があります」(市橋さん)とのこと。そんな技術部が現在、エコランとともに目指しているのが、コロナ禍が明けて9月23日(土)に全面復活するかんらんさいです。「技術部は例年、ピザ窯を製作しますが、今年はさらに市橋くんが焼製器を作る予定

です。また、生徒会と協力してステージの拡充化にも取り組みます。すごく楽しみです」と櫻井部長は意欲を見せます。

奉仕活動を新たな挑戦に繋げる 技術部のユニークな取り組み

技術部の顧問は、中学の技術科の寺島徹先生です。2009年に着任した当初、授業の片付けを手伝ってくれる生徒達に、お礼としてものづくりを教えていたそうです。やがて生徒から「何か大きなことをしてみたい」という声が出始め、たまたまテレビで見たエコランに挑戦しようと同好会を発足。2012年より部に昇格しました。寺島先生に話をうかがいました。

「エコランの全国大会で部員達は現地に2泊3日滞在します。朝は3時に起きて、早朝から車検やレースに臨み、自炊もしてチームを運営します。こうした成功体験が自己肯定感を生み、自発的に動ける力になっていきます」

グループワークを重視する一方、個人の研究活動も活発ですが、そこにはルールがあります。「まず企画書を作成してプレゼンテーションを行い、皆の承認を得て初めて自分の好きな研究を行うことができます。また、ものづくりには資金が必要です。そこで技術部では仮想通貨『KG』を設けています。例えば学内の備品修理を行うと500KGを得ることができます。1KG＝1円と換算し、個々が貯めたKGを活動資金として自主研究を企画するシステムになっています。請求書や出納帳も作成するのでコ



設計図や記録で埋め尽くされた壁

スト感覚も身につきます」

他にも学校行事に協力したり、後輩を指導することでKGを獲得できるそうです。奉仕しながら自らの目標に向かっていく学びは、校訓の体現とともに、未来の自己実現へと繋がっています。また、毎日の活動記録はそのまま大学受験のアピール材料となり、推薦入試で進学する部員も少なくありません。

そんな技術部では発足当初から「信頼・感謝・責任」がスローガン。「車を作って安全に走らせるには、互いに信頼しあうことが何より大切です。また、周囲の支援への感謝、道具管理や安全面への責任。それらが自然に受け継がれ、部のモットーとなっています」

創意工夫の楽しさを追求する技術部。これからの新たな発想でチャレンジを続けていきます。

現在の活動や目標について
中高の部長・副部長にインタビュー

部長を務める櫻井拓登さん(高2)に今年のエコランへの意気込みを聞きました。「高2の車は、僕が設計を担当しています。細かい構造を意識した結果、従来よりも細い鋼材を使うことができ、昨年の先輩達の車体より7キログラムほど軽量化に成功しました。技術部での歴代最高記録がガソリン1リッター当たり650キロメートルの燃費性能なので、その更新を狙います」

副部長の市橋有人さん(高2)は、エコカー以外にも独自の研究に取り組んでいます。「昨年はレーザーと光センサーを活用した電子楽器を製作しました。今年は影絵をテーマにしたインタラクティブアート(観客を巻き込むことで完成するアート)に挑戦しています。手の形をカメラで認識して三次元の座標に置き換え、手の影とアニメーションが相互に作用する作品です。かんらんさいで

左から櫻井拓登さん(部長)、市橋有人さん(副部長)、寺島徹先生、増田柊凜さん(中学部長)、斉藤晃成さん(中学副部長)



多様な文化や人と触れ合いグローバルな視点を生み出す 関東学院六浦中学校・高等学校「ドバイ研修」実施

多国籍都市ドバイでの語学研修

生徒が主体的に考え、チャレンジし、経験できるプログラムを提供している関東学院六浦中学校・高等学校。2017年に修学旅行を廃止し、独自の「選択制グローバル研修」を展開しています。各自が自由に国内外の研修先を選ぶことができ、海外の研修先はカナダ、ドバイ、マレーシア、カンボジア、台湾、アラスカなど多地域に及びます。

ドバイ研修は今年1月28日から2月4日に実施されました。ドバイは人口の約9割が外国人で、ヨーロッパ・アフリカ・アジアなど多国籍の人々が暮らす多文化都市です。そのため共通語として英語が使われています。グローバル事業部長を務める小林慶太先生に研修の狙いを聞きました。

「ドバイ研修は2022年に始まり、今回が二回目です。今年は中3から高2まで14人が参加しました。ドバイには様々な国籍の

人が生活しています。日本も今後海外から多くの人材が流入するため、英語でのコミュニケーション力は不可欠な素養です。しかも英語圏だけでなく、様々な国のクセのある英語を話す人との交流も増えるでしょう。その意味で、ドバイ研修には大きな意義があると考えます」

参加した高校生のコメント

選択制グローバル研修では必ず事前学習を行います。今回もドバイの政治・文化・宗教・人種などを調べ、実践的な英会話を練習してから出発しました。現地では世界80カ国以上の国籍の生徒が在籍する語学学校「ESドバイ」で授業を受け、英語でのディスカッションや寮生活を体験。現地大学の講義も受講するなど、多様なバックグラウンドを持つ人達と交流しました。また、アクティビティでは、観光やクルージング、歴史的建造物や美術品の見学を通じて中東の

新たな視野や成長に繋がる体験

小林先生は「最初こそ英語での自己表現に緊張したり、うまく会話ができなかった生徒も、慣れると積極的に意見を述べるようになり、短期間でも成長を感じました。英語で会話したり、連絡先を交換するだけでも生徒には自信になります。この経験を新たな視野や目標へと繋げてくれれば」とさらなる成長に期待を寄せました。

六浦中高は選択制グローバル研修のほか、短期から長期の海外留学斡旋、海外大学進学をサポートなど、幅広い国際教育のコンテツを実践しています。迫り来る多文化共生社会にいち早く対応し、グローバルに活躍する人材を育成する独自の教育に今後も注目したいと思います。



左から小林慶太先生、伊井理沙子さん、金泉優奈さん、天野真桜さん

需要が高まる帰国生受け入れ制度。テーマは学校も寮も「小さな地球」。



関東学院六浦中学校・高等学校 教頭
中田 努

世界中から生徒が集まる国際寮

2021年にスチューデントハウス（寮）の運営を始めてから、本校を志望する帰国生や留学生の数が一気に増えました。海外の日本人学校は基本的に中学校までしかありません。卒業を機に子どもだけが帰国して日本の高校に進学するご家庭も多く、寮を持つ学校が求められているという背景があります。また、コロナ禍でオンラインの学校説明会や入学選考を導入したことも志望者の増加に繋がったと考えています。

寮は183室、全て個室です。東京・横浜の近郊でこれだけの寮を有する学校は稀です。現在は海外からの帰国生、留学生、国内地方からの生徒ら42名が入寮しています。

多文化・多様性が求められる昨今、本校は「学校も寮も小さな地球に」をコンセプトにしています。様々な文化やバックグラウンドを持つ人達が共存し、共に生きていくという感覚を、全ての生徒が身をもって体験してほしいと願っています。

グローバルな環境で校訓を具現化

現在は帰国生と留学生合わせて39名が在籍。今年入学した帰国生は17名に上ります。今年度の高1のGLEクラス（高い英語力をベースに探究力を養うクラス）は3分の1が海外にバックグラウンドを持つ生徒で、英語と日本語、中国語を交えて会話をしています。在校生は帰国生との会話で、様々な国の現状を聞いたり、世界では既に日本が置いていかれ始めていることに気づくかもしれません。これは非常に大事な学びです。

様々な国で育った生徒は習慣も異なるため、寮の大浴場やトイレの入口には使用法を書いた案内を掲示しています。また、週末も拘束される日本の部活動に戸惑いを感じる帰国生もいます。多様性の中で、私達も思いも寄らなかった課題に気づかされます。

現在はアジア地区からの帰国生が多い状況ですが、今後は北米・北欧・アフリカなどにも生徒募集の活動範囲を拡大します。寮が帰国生や留学生で埋め尽くされる頃には、まさに小さな地球となり、文化的背景にかかわらず他者を尊重し、校訓「人になれ 奉仕せよ」を体現した生徒を輩出する学校になっていることでしょう。世界中に友だちができれば、それは最終的に世界平和へ繋がります。中高時代にそうした絆を作り上げていける環境を提供できる学校でありたいと思います。



バッハ・コレギウム・ジャパンを迎えて開催 関東学院小学校「創立70周年記念コンサート」

横浜みなとみらいホールで開催された記念コンサートの報告と共に
岡崎一実校長に記念事業の意義や今後の展望をお聞きしました。



創立70周年の最後を飾る バッハの教会カンタータ

昨年、創立70周年を迎えた関東学院小学校。年度を通じた記念事業の締め括りとして、今年2月27日、横浜みなとみらいホールで創立70周年記念コンサートが開催されました。バッハの演奏団体として世界的に有名なバッハ・コレギウム・ジャパン（以下、BCJ）を迎えて、児童と保護者、教職員、卒業生、学院関係者、来賓など約千二百人が集いバッハの音楽を堪能しました。

同小学校は在学中にたくさんの夢のたまごに出会う機会として、本物の人・もの・コトを体験する《夢のたまごプログラム》を展開しています。そこで2019年にBCJを迎えてクリスマスコンサートを開催した経緯があり、今回のコンサートに繋がりました。音楽史上最も重要な作曲家であるバッハは、偉大な宗教音楽家でもあります。今回はバッハの教会カンタータを中心にプログラムが構成されました。

事前学習で理解を深め 本物の芸術に触れる

子ども達はよりコンサートを楽しめるよう、昨年9月から今年2月まで、全クラス10時間ずつ特別授業を受けて事前学習しました。講師を務めてくださった柳沢藍さんは、フランスの学校で音楽・芸術を教えることができる音楽家の国家資格「DUMI」を日本でただ一人取得している方で、バッハやカンタータ、古楽器、コンサートのマナーなどを楽しく、わかりやすく教えてくださいました。また、2月の学習発表会で「バッハにあいにいったよ」と題したオリジナル劇やドイツ語の賛美歌を披露した1年生は、このコンサートでも重要な役割を演じます。

子ども達も参加して 笑顔と感動があふれる

コンサートのオープニングは、BCJの首席指揮者でありオルガニストの鈴木優人さんが登場し、パイプオルガンで「トッカータとフーガニ短調 BWV 565」を迫力満点に独奏。続いて岡崎一実校長が登壇し「バッハのカンタータは神様を賛美する音楽です。コンサートの中にある、たくさんの夢のたまごを探しながら聴いてください」とメッセージを送りました。その後はメンバーが次々登場し、カンタータを数曲披露。世界から集まった音楽家による圧巻の歌声と演奏を楽しみました。

第二部では、学習発表会で「バッハにあいにいったよ」を演じた1年生がステージに登場。場し、パイプオルガンで「トッカータとフーガニ短調 BWV 565」を迫力満点に独奏。続いて岡崎一実校長が登壇し「バッハのカンタータは神様を賛美する音楽です。コンサートの中にある、たくさんの夢のたまごを探しながら聴いてください」とメッセージを送りました。その後はメンバーが次々登場し、カンタータを数曲披露。世界から集まった音楽家による圧巻の歌声と演奏を楽しみました。



可愛いミニバッハには皆が笑顔に

BCJの首席指揮者でありオルガニストの鈴木優人さん

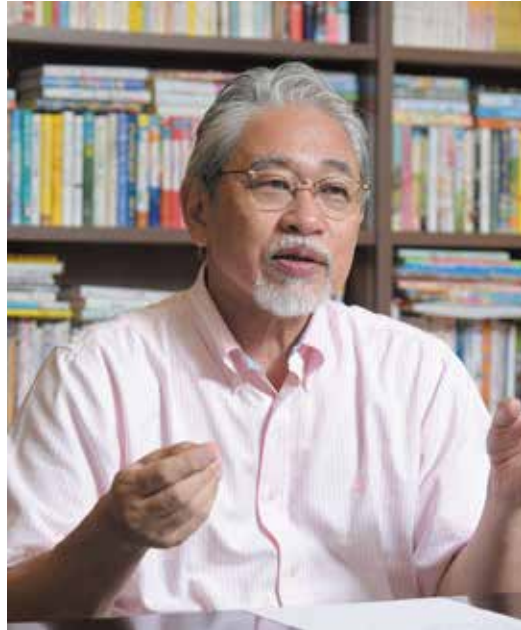
岡崎校長「周年事業を新たな歩みへのステップに」 子ども達の記憶に残る1年に

その後方には、本来ならば5年生の時に学院クリスマスコンサート（2021年度はコロナ禍の影響で中止）で聖歌隊としてこのホールに出演するはずだった6年生も並び、ルターの賛美歌をドイツ語で合唱するなどBCJと共演して拍手喝采を受けました。

その後も演奏家による古楽器の紹介など楽しい演出が続きます。本編最後のカンタータの演奏が終わると、学習発表会でバッハ役を演じた1年生が可愛いミニバッハ姿で登場して花束を贈呈。BCJの皆さんも大喜びでした。そしてアンコールの「カンタータ第147番主よ、人の望みの喜びよ」の美しい調べで終演。70周年の締め括りにふさわしい感動のひとつとなりました。

今回のコンサートと特別授業は、教員の企画立案と運営により実現しました。70周年記念事業は全て終わりましたが、同校では今後もポストコロナ時代の新たな学校行事の形を模索し、子ども達が夢のたまごと出会える学びを実践していきます。

私が校長に就任した2012年は、創立60周年の年でした。校舎の解体・改築時期と重なり校務に忙殺され、記念のポストカードを作るだけで精一杯でした。そこで65周年は「子ども達の思い出に残る1年にしよう」と、記念礼拝や施設改修、オリジナルグッズ制作など様々な記念事業を行いました。また、5年ごとに記念イヤーを設ければ、子ども達は在学中に一度はそれを体験することになります。70周年では教員の皆さんがチームを作り1年前から準備を進めました。昨年10月に実施した記念礼拝を中心に、記念コンサート、そして前号で触れたライブラリー改修や、オリジナルチェックのマフラーとストール、ビッグベア、フォトフレーム、保護者会によるオリジナル缶入りビスカウトなどの記念グッズを制作しました。また、70周年を機に、体操服とラン



関東学院小学校 校長

岡崎 一実



70周年に誕生したビッグティベアは子ども達に大人気

男子はズボンとイートン帽、女子はスカートとベレー帽という従来の服装規定を変更し、自由に選べるようにしました。早くも今年の入学式では数名の男子がベレー帽を着用していました。本校には制服がなく、関東学院小学校の児童としてふさわしい服装が一定の範囲で共有され、統一感や格식을培ってきました。その伝統を守りつつ、ジェンダーレスなど時代の流れに対応することが大切だと考えています。

服装規定のジェンダーレス化

体操服は緑と白の2色展開。オプションで紺の長袖ジャージも用意しました。ランドセルは紺と茶の2色展開で、リュックタイプになり容量が増え、なおかつ軽くなりました。いずれも自分の好きな色を選べます。新人生だけでなく、既に在校生も半数以上が新しいランドセルを使用しています。

体操服とランドセルのモデルチェンジ

ドセルのモデルチェンジ、服装規定のジェンダーレス化などを実施。いずれも「自分で選ぶ」をコンセプトとしています。

なぜ「選べる」がコンセプトなのか

最近、何事も自分で決められない子どもが増えているという話を耳にします。周囲に気兼ねして自分の意見が言えない、自分で決めたくないなど理由は様々だと思えます。本校の教育目標の一つが、「自分で考え、判断し、

行動しようとする子」を育てることです。服装一つにしても、自分で選択することは大事な経験です。

さらに、多様性の尊重があります。少数派の人が多数派に気兼ねすることなく、誰もが好きなものを選び、個性を受け入れる態勢を学校として整えたいと考えました。

伝統を守りながら変革に挑戦

年間を通じた記念事業の意義とは何か。歩みを振り返り、現在の立ち位置を確かめることで75周年、100周年に向けた新たな一歩を踏み出す足場を固めることだと思います。70年の歴史の中で醸成されてきた風格や佇まい、それは揺るぎないものです。伝統を受け継ぎながら変革に挑戦することが、今を担う私達の使命ではないでしょうか。残された任期の中でそれを繋いでいくことが次なる課題だと思っています。



体操服は緑と白の2色展開
ランドセルは色もデザインもスタイリッシュ

関東学院大学人間共生学部の折田明子ゼミナールが 関東学院六浦小学校の情報教育の授業に協力

インターネット社会の中で成長していく子ども達に向けて
折田教授が実施したデジタル・シティズンシップ教育を紹介します。

情報化社会の一員として 適切な判断や行動を学ぶ

今年3月、関東学院大学人間共生学部の折田明子ゼミナールが、関東学院六浦小学校と連携し、卒業間近の小学6年生を対象に、「ネットやSNSについて話そう」マンガ教材『人気の裏側』と題した情報教育の授業を実施しました。

情報化社会において、インターネットやSNS等によるトラブルが増加しています。現代の小学生は幼い頃からデジタル端末に親しんでおり、今後も日常生活や学習でソーシャルメディアに触れながら成長していきます。そのため情報化社会の特性や危険性への理解を深め、自ら判断して安全に活用できる能力を身につける、いわゆる「デジタル・シティズンシップ教育」が求められています。六浦小学校が本格的にデジタル・シティズンシップ教育を始めるにあたり、情報社会学を専門とする折田明子教授とゼミ

ナールの学生がワークショップ形式の授業に協力することになりました。

折田教授開発のマンガ教材を 使用したワークショップ

ワークショップで使用した教材は、国立機関であるRISE社会技術研究開発センターの助成を受けて折田教授らが開発した中学生向けマンガ教材「人気の裏側」です。些細なきっかけで始まるインターネット上のいじめやトラブルを題材にした物語で、折田教授はこの教材を使ったワークショップを各所で展開しています。今回の授業は、子どもと大人がインターネットやSNSについて一緒に考える授業を実践したいという六浦小学校と、折田教授の目指す方向性が一致したことから実現したものです。

当日は、最初に折田教授から現代のインターネットコミュニケーションの特徴やリスクについて説明があり、その後、マンガ教材

を使ったワークショップが始まりました。

物語の主な登場人物は男子中学生3人。傍観者である主人公、不登校になる友人、そのきっかけを作ってしまう陽気なクラスメートです。SNSで人気者となった友人は、とあるきっかけで投稿の裏側がクラス内で話題となり、不登校になってしまいました。主人公がどう行動すべきか悩むシーンで物語は終了。児童はグループに分かれ、登



折田教授が開発したマンガ教材

ゼミナール所属の学生が サポート役として参加

ワークショップには、情報リテラシー教育に関心を持つ3人のゼミ生が参加し、議論が円滑に進むようサポートしました。別所里音さん(コミュニケーション学科4年)は、「クラスメートが不登校になったらどう対応したいかを話し合いました。大人の場合は相手とコンタクトを取ろうと考える人が多いと思うのですが、児童達は逆に家に来られたら嫌だと思うから何もコンタクトを取らないなど、斬新な意見も多くてハッとさせられました。ある意味、リアルな問題として考えてくれたのかと思います。卒業研究で小学生のICT教育の教材を作るプロジェクトに参加しているので、今回の経験を活かしたいです」と話しました。

森本彩水さん(同学科4年)は、異なる意見も受け入れながら、自分の意見をしっかりと述べ



りと述べる児童達に感心したそうで、「自分が登場人物の誰に当てはまるかというテーマに対して、自分は誰にも当てはまらないから、自分なりの接し方で不登校の人に接していきたいという意見があり、発想の柔軟さを感じました。今回小学生と話してみても、インターネット上のコミュニケーションに対してポジティブな意見が多かったもので、悪い面ばかりでなく、良い面についてもきちんと伝えていきたいと思いました」と感想を述べました。

高木隆輝さん(同学科4年)は、児童との対話を通じて、自分達の世代との視点の違いを実感したそうです。「SNSの怖さを感じさせるマンガなので、僕らだと結末を予想してこうしたいほうがいいんじゃないかと結論づけてしまうところを、児童達からは非常に多くの意見が出てきて、逆に考えさせ

られることも多かったです。今の小学生は既にスマートフォンを持つている子も多いので、僕らとは違った視点から情報化社会を見つめ、思った以上にいろいろ考えているんだなと思いました」と話しました。

子どもと大人が話し合える 新たなマンガ教材を開発中

今回の授業について、「中学生以上だと主人公に最も共感するという声が多かったのですが、今回は不登校のきっかけを作った生徒に共感する声も意外と多かったです。マンガを見て、こういうのムカつくよねなど、児童が感情移入している様子には手応えを感じました。誰もが無意識に人を傷つけてしまう可能性があり、それを自分事として捉えることに繋がるからです。これをきっかけに、インターネットの特徴やリスクを把握



関東学院大学 人間共生学部 教授

折田 明子

慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科後期博士課程単位取得退学、のちに博士(政策・メディア)取得。2013年より関東学院大学。専門分野は情報社会学。若年層のリテラシー教育や、死後データのプライバシーの研究にも注力している。

して、安全な活用につけて欲しいですね」と語る折田教授。児童の率直な意見を引き出したのは、しっかりと目線を合わせたり、絶妙なタイミングで声掛けしてくれたゼミ生の皆さんのおかげですとも述べられました。

今後については、「大学の人間環境研究所から助成を受け、六浦小学校との共同研究として低学年・中学年・高学年向けのマンガ教材を制作します。親や教員、子どもがインターネットについて一緒に話し合えるような教材を目指しています。来年度から実際の授業で使用して、最終的には小学校の先生方だけでデジタル・シティズンシップ教育を行っていただく計画です」とのこと。その展開にも注目していきたいと思います。

関東学院大学はこれからも学院内での連携に取り組み、現代社会における課題解決を目指します。



昨年設立10周年を迎えた「関東学院のびのびのば園」 保育・教育の理念を具現化する園庭が完成

認定こども園に移行して10年を経た同園の仲程剛園長に
生まれ変わった園庭と地域活性にかける思いをお聞きしました。

幼稚園として野庭町に誕生 2012年、認定こども園に

横浜市港南区野庭町ではかつて大規模な開発が行われ、1974年に横浜市内最大級の広さとなる野庭団地が誕生しました。この街で1976年4月に学院7番目の学校・園として開園したのが「関東学院野庭幼稚園」です。同園は2012年に保育園機能を追加し、認定こども園「関東学院のびのびのば園」に改称。2015年には、子ども子育て支援新制度開始に伴い、幼稚園機能と保育園機能を併せ持つ幼保連携型認定こども園となり、昨年、こども園設立10周年を迎えました。

2021年に就任した仲程剛園長は、「この園は設立時からキリスト教の精神に基づき、遊びの中から子どもの主体性を引き出すことを大事にしてきました。特にこども園になってからは、それをより鮮明にしていきたい」と思います。この10年は、保育と幼児教

育の一致点を模索しながら、のび園なりの形や方向性を構築してきた時代ではないでしょうか」と話します。

皆の思いをカタチにした 園庭が遂に完成

昨年度は10周年を記念して様々な取り組みを行いました。中でも特筆すべきは園庭の改造です。

「園庭づくりがスタートしたのは2015年です。のび園の目指す保育・教育を具現化する場に変えていこうと、運動場のようだった園庭の片隅に職員がクローバーの種をまくことから始まりました」と語る仲程園長。そこから少しずつ改良を重ね、2018年には、在園児の父親や祖父らが任意に活動する「おやじいくの会」が、園庭中央に「段々砂場」を製作。さらに植栽や植樹を増やし、園庭に住む昆虫や生き物を観察したり、収穫した野菜や果物を味わうなど、園庭を遊

10周年記念礼拝・式典や アニバーサリー祭を実施

この園庭では、高い場所に登ることも、お花を摘むことも、子ども達の好奇心次第です。たとえ野菜や果物が実る前に摘んでしまっても、それは一つの体験であり、決して何かを禁じたり叱ることはしないと仲程園長は語ります。

「のび園のキャッチフレーズは『夢と希望と愛に満ちたこども園』です。今、子どもの主体性に関わる能力として〈非認知能力〉が注目されています。数値化できない能力のことであり、自分と向き合う力、自分を高める力、他者と繋がる力の3つに大きく分類されます。まさに、夢（＝自分と向き合う力）、希望（＝自分を高める力）、愛（＝他者と繋がる力）であり、それを具現化するのがこの園庭だと思っています」



式典最後に教職員が振り付きで歌を披露

10周年の取り組みは他にもありました。10周年記念特設サイトの開設、教職員のシャツのリニューアル、アニバーサリー祭としての「なつのつどい」などを実施。今年1月21日には学院関係者、キリスト教関係者、野庭地域の自治会や園・学校の方などを招いて記念礼拝・式典を執り行いました。仲程園長より感謝の言葉、園の方針、そして「今後も地域と共に生きる園を目指します」との抱負が述べられた後、新しい園庭の説明や、映像でこども園の歩みを紹介。最後には教職員からのメッセージソングが披露されました。また式典終了後には、完成した園庭の見学会を行いました。

「礼拝・式典は、この園がキリスト教に根差した園であることを、地域の方に改めて知っていたく機会にもなったと思います。また昨夏、コロナ禍により2年ぶりの開催となった『なつのつどい』を10周年記念行事に位置付け、モグラ叩きやヨーヨー釣りなどの縁日遊びや、のび園オリジナルクッキーの販売、無印良品による出張販売などを行い、在園児・保護者と一緒にお祭り気分を楽しみました」

次なる節目に向けて新たな一歩を踏み出した、のび園。園庭の次は、やはり子ども達の主体性を育む園舎改造を目指すことになるでしょう。「具体的に動き出すのは、まだまだ先で、実現する頃には私は既に退任しているでしょうが、そこに向けた議論をそろそろ始めようかなと考えています」と仲程園長。今後の取り組みにも注目です。



びと遊びの中心に位置付けてきました。そして昨年、本格的な改造工事を行い、新たな園庭が完成しました。

「ここに至るまでには、関東学院大学の先生や園庭専門家を招いて研修したり、他の園庭を見学したりするなど、教職員は長い年月をかけて議論を重ねてきました。私達の園庭のコンセプトを理解していただける設計業者を見つけたのにも苦労し、結局、着工まで7年を要しましたが、10周年という節目に完成を迎えることができ嬉しく思います」

新しくなった園庭には、子ども達の主体性を高める仕掛けが散りばめられています。まず目に飛び込んでくるのがガチャポンプ

（手押しポンプ）です。子ども達はハンドルを力いっぱい押し下げて水を吸い上げ、砂場に川を作ったり、泥だんごを作って遊んでいます。

トンネルも、子ども達にとって魅力的な空間。通り抜けたり、ままごとや基地ごっこをしたり、遊び方は自在です。

大きな石垣は、上に登ったり、つたい歩きをしたり、飛び降りたり、子どもたちの挑戦心を引き出します。他にも段々になっている場所を多く設け、変化に富む空間を演出。また、四季折々の草花や、野菜の収穫が楽しめるよう植樹・植栽を施し、自然の中で五感を使って遊び込める園庭ができあがりました。

なつのつどいでは縁日遊びを楽しんだ



楽しい装飾でお出迎え

地域社会との関係をより深め 子育てにやさしい街を目指す

地域の子育て支援に積極的に取り組む同園は、未就園児と保護者に向けたプログラムの提供のほか、野庭地域の子育て支援イベントへの教職員の出向、「無印良品港南台パーズ」とのコラボイベント、他園や行政と連携したプログラムなどを実践しています。

今後は保護者同士が情報交換や悩みを相談し合える「子育てカフェ」の開設にも取り組んでいきたいそうです。

「私の夢は、この地域の全ての保育園や幼稚園が連携して、子育てにやさしい街を実現すること。若い世帯が住みたくなるような街づくりに貢献し、地域の活性化に繋がりたいですね」と語る仲程園長。それに向けた足場は既に固まっています。

「10年を経て、ようやくこの園の存在と活動が認知されてきました。さらに子育て支援を充実させ、地域社会との関係を深めながら、野庭地域にある認定こども園としての存在感を高めていきたいと思っています」



関東学院のびのびのば園 園長
仲程剛

関東学院ネットワーク

関東学院大学 横浜・関内キャンパスには2つのカフェがあります。
お食事やティータイムに心地よいひとときをお過ごしください。

Nathan-Coffee 1884

関東学院大学 横浜・関内キャンパス1Fの「Nathan-Coffee 1884」は、学生の皆さまはもちろん、地域の皆さまにもご利用いただけるカフェです。関東学院の源流のひとつである横浜バプテスト神学校が山手に創立された“1884”年と、アメリカのバプテスト派宣教師“ネイサン”・ブラウンにちなんで名付けられました。



住所／横浜市中区万代町1-1-1
関東学院大学 横浜・関内キャンパス1F
☎／045-264-7510
[営業時間] 9:00～20:00
[定休日] 年中無休
[アクセス] JR関内駅南口から徒歩約2分



カフェHPはこちらより
ご覧いただけます。

BACON Books & cafe

BACON Books & cafe は、2023 年 4 月に開校した関東学院大学 横浜・関内キャンパスのエントランスに隣接する広場「サンクンガーデン」に面した、B1Fにあるブック&カフェです。店名は「知は力なり」で知られるイギリスの哲学者フランシス・ベーコンにちなんで名付けられました。大学と書店の連携により、併設のブックエリアには地元書店が選書したこだわ

りの本が揃います。学生・学校関係者だけでなく、地域の皆さまにご利用いただける知的交流の場をご提供いたします。また食事では、ステーキ・フライドチキン・ベーコンなどの肉料理、厳選したクラフトビールやオリジナルカクテルなどをご用意しております。



住所／横浜市中区万代町1-1-1
関東学院大学 横浜・関内キャンパスB1F
☎／045-264-6290
[営業時間] 11:00～22:30
[定休日] 年中無休
[アクセス] JR関内駅南口から徒歩約2分



カフェHPはこちらより
ご覧いただけます。



スポーツ栄養士

田辺 幸優 さん

1993 年生まれ、神奈川県立座間高等学校出身。
2016 年関東学院大学人間環境学部健康栄養学科
(現・栄養学部管理栄養学科) 卒業。
東海大学医学部付属病院(管理栄養士)勤務を経て
スポーツ栄養士に転身。現在フリーランスで活動。

指導により栄養バランスが改善した食事内容



指導により栄養バランスが改善した食事内容

指導により栄養バランスが改善した食事内容

アスリートを栄養面で支える
エキスパート

アスリートを栄養面で支える
エキスパート

アスリートを栄養面で支える
エキスパート



チームへの栄養講習会の様子

プロアスリートからジュニア世代まで
一人でも多くの選手に食事と栄養の大切さを伝えたい

お知らせ 関東学院へのご支援のお願い

日頃より関東学院の活動に対して、深いご理解とご賛同をいただき、物心両面に渡るご支援を賜っておりますこと、厚く御礼申し上げます。

関東学院は、横浜に根ざした私立学校として、建学の精神「人になれ 奉仕せよ」のもと、教育、研究、地域活動、社会連携活動に尽力しております。

私たちが大切にしてきた「人になれ 奉仕せよ」という校訓には、いつの日か人と社会に貢献できる人材になるために、聖書をはじめ、さまざまな書に触れ、学び、努力し続けなさい、という意味が込められています。

そのためには、関東学院での学びを通して、知識や技術を修得することは勿論のこと、幅広い教養を持ち、慈愛に満ちた、個性豊かで知性溢れる若者を育ててゆくことに全力を尽くします。

私どもの教育理念にご賛同いただける皆様、学院各校と繋がりのある企業・団体の皆様、そして20万人を超える学院各校の卒業生の皆様にも母校と後輩のためにお力添えをいただければ幸いです。

関東学院の発展にご理解ご賛同いただき、あたたかいご支援を賜りたく、お願い申し上げます。

税制上の優遇措置について

学校法人関東学院に対する寄付は、特定公益増進法人への寄付金として、寄付金控除の措置を受けることができます。

※入学（園）した年の年末（12/31）までに新生入又は保護者が納付した寄付は所得税法第78条の規定により「学校の入学に関する寄付金」とみなされ寄付金控除の対象になりません。



KANTO GAKUIN

寄付に関するお問い合わせ

学校法人関東学院 募金・校友課
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-2685
FAX 045-786-5729
Mail bokin@kanto-gakuin.ac.jp



東名高速道路 東海道新幹線

横浜市

関東学院中学校高等学校
☎ 045-231-1001
関東学院小学校
☎ 045-241-2634

関東学院大学
☎ 045-781-2001(代)
● 横浜・関内キャンパス
法学部／経営学部
人間共生学部 コミュニケーション学科
大学院(経済学研究科 経営学専攻／法学研究科)

関東学院大学
☎ 045-781-2001(代)
● 横浜・金沢文庫キャンパス

鎌倉市

関東学院大学のびのびのば園
☎ 045-845-0876

逗子市 葉山町

関東学院大学
☎ 045-781-2001(代)
● 横浜・金沢八景キャンパス
☎ 045-786-7002
国際文化学部／社会学部／経済学部／理工学部
建築・環境学部／人間共生学部 共生デザイン学科
教育学部／栄養学部／看護学部
大学院(文学研究科／経済学研究科 経済学専攻
工学研究科／看護学研究科)

関東学院六浦中学校・高等学校
☎ 045-781-2525

関東学院六浦小学校
☎ 045-701-8285

関東学院六浦こども園
☎ 045-781-0170

学校法人
関東学院
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
法人事務局 ☎ 045-786-7028(代)
<https://www.kanto-gakuin.ac.jp/>